

2020年度 横浜市立大学 国際教養学部

特別選抜入学試験 【海外帰国生／国際バカロレア／外国人留学生／社会人】

小論文問題

【注意事項】

1. 試験時間は90分である。
2. 試験開始の合図まで、この問題冊子を開いてはいけない。ただし、表紙はあらかじめよく読んでおくこと。
3. 問題の印刷は1ページから5ページまである。
4. 解答用紙は2枚である。
5. 試験開始後、受験番号と氏名をすべての解答用紙の所定の欄に記入すること。
6. 問題冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所等があった場合および解答用紙が不足している場合は、手をあげて監督者に申し出すること。
7. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答用紙の裏面に記入してはいけない。
8. 問題番号に対応した解答用紙に解答していない場合は、採点されない場合もあるので注意すること。
9. 解答する字数に指定がある場合は、句読点も1字として数えること。英数字を記入する場合は、1字分のマス目に2文字まで記入してよい。
10. 問題冊子の中の白紙部分は下書き等に使用してよい。
11. 解答用紙を切り離したり、持ち帰ってはいけない。
12. 試験終了まで退室を認めない。試験中の気分不快やトイレ等、やむを得ない場合には、手をあげて監督者を呼び、指示に従うこと。
13. 試験終了後は問題冊子を持ち帰ること。

[I] 次の文章は、都市に関する書籍の訳者による解説です。以下の設間に答えなさい。

「場所の力、それはごく普通の都市のランドスケープ^(注1)に秘められた力である、共有された土地の中に共有された時間を封じ込み、市民の社会的な記憶を育む力である」と、ドロレス・ハイデン^(注2)は述べている。彼女が言う社会的な記憶とは労働者の歴史であり、民族や女性の歴史を意味する。特に、地域社会における悲痛な体験や敗北した闘争の歴史を含むものである。これらは、書物に記されたり、公園や広場の銅像になって表象される、強者や勝者、すなわちメジャーの歴史とは明らかに異なるもので、人々の口伝や街角の何気ない景観などによってのみ伝えられる市井の人々のアイデンティティとも言えるものだろう。

場所とは均質に広がる数学的な3次元の空間とは異なる、ある種のノード^(注3)を伴うものである。そこには意味の疎密や強弱がある。また、歴史的にみれば、場所の概念には個人が一定の規模の土地を所有する、あるいはコミュニティの構成員になる、という社会的経済的な意味合いも込められている。建築という行為のみならず、人々の生活の営みは空間を場所化する行動に他ならない。空間に手を入れ、使い込んでいくことにより、さまざまな意味が派生し、そこに記憶が蓄積されていき、場所と呼ぶべきものとなる。場所とは社会的な記憶の源泉であり、記憶の糸が紡がれた織物の(A)ような存在であり、そしてその力は再び人間の五感へ働きかけてくるものである。私達はいつも「場所の力」を感じて生きている。都市の景観はどんな言語表現よりもはるかに饒舌に場所の社会的な記憶を語る力を有している。私達は場所を通して過去に生きてきた先人達と対話することもできる。場所には人々にモラルや教訓を伝える「教育力」も内在している。同時に、「場所の力」は現代に生きる多様な人々や地域社会を相互に結びつけることも可能とする。今日、社会の絆としての都市生活の意味や可能性を市民自らが発見できる場所、さらに、その「場所の力」を顕在化するための仕事が、歴史家や芸術家も巻き込んだ、より多くの分野の専門家との市民の参加によるコラボレーションに求められている。

「場所の力」とは、「ゲニウス・ロキ (Genius Loci)^(注4)」にも通底する概念である。しかしながら、「場所の力」は現代に生きる私達市民一人ひとりの生活に密着した記憶に根ざしたものであり、かつそれらの総体としてより広範な社会性を帯びた概念である。そして、その解釈と可視的表現のプロセスに市民や専門家の協働といった外へ向かって運動していく力が込められている点が大きな特徴である。さらに著者は、こうしたプロセスを「公共事業」と呼び、その結果、「場所の力」が顕在化された空間を「公共空間」として位置づけていることに戦略的かつ実践的な視点を読み取ることができる。

(中略)

著者は本書の冒頭で四半世紀前の新聞紙上における都市社会学者と建築評論家の討論を取り上げ、今日の建築保存と都市保存の論点の整理を行っている。都市の景観を「地と図」の関係から眺めれば、優れた建築作品は「図」に着目したものであり、社会史の視点からのバナキュラー^(注5)な街並



みの保存は「地」に着目したものになぞらえられる。そして、都市の景観が眺めるに値する一つの絵として成り立つためには、安定した「地」と洗練された「図」の間の良好な関係こそが「場所の力」に求められるものである。建築学をバックグラウンドとする著者は、「図」にのみ目が行きがちな建築分野に対して厳しいスタンスをとりながらも、建築と社会の良好な関係のあるべき姿を思索(B)している。

もう一点、「場所の力」によって関係付けられるものとして、都市の社会的経済的文脈の存在を示唆している。すなわち、都市労働者階層の歴史とランドマーク的建築作品は、それらを建設した石工や大工の技術や、それらを維持管理していた庭師の技術的側面からも解釈され得ることを指摘している。この点に関する取り組みは、日本でも近年ようやく展開し始めたところで、地域資源を活かしたまちづくりに取り組む市民運動にも大きな示唆を与えるものである。

(出典 ドロレス・ハイデン著 後藤春彦・篠田裕見・佐藤俊郎訳『場所の力 パブリック・ヒストリーとしての都市景観』(英題 The Power of Place 1995年出版) 問題作成にあたり本文を一部改変)

(注1) ランドスケープ：景観を構成する諸要素。ある土地における、資源、環境、歴史などの要素が構築する政治的、経済的、社会的シンボルや空間。または、そのシンボル群や空間が作る都市、場所や地域そのもの、地域環境。

(注2) ドロレス・ハイデン：1945年- 建築・都市計画を専門とする教育者・研究者・実務家。歴史学を学んだ後に建築学に転じた。

(注3) ノード：ネットワークの接点。結節点。

(注4) ゲニウス・ロキ (Genius Loci)：事物に付随する守護の靈という意味の「ゲニウス(Genius)」と場所・土地という意味の「ロキ(Loci)」の二つのラテン語をもととし、場所の特質を主題化するために用いられた概念。日本では「土地の精霊」または「地霊」などと訳される。

(注5) バナキュラー：その土地の固有のもの、固有の様式であること。また、そのまま。

(1) 下線部(A)について、場所が「社会的な記憶の源泉」「記憶の糸が紡がれた織物」と表現されているのはなぜか。100字以内でまとめなさい。

(2) 下線部(B)について、「建築と社会の良好な関係」を本文に即して簡潔に要約し、「建築と社会の良好な関係」について、例を挙げて、あなたの考えを250字~300字で述べなさい。

〔 II 〕 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

2017 年、米国のトランプ大統領が就任直前の単独記者会見の席上で、米国ニュース・チャンネル CNN の記者に対して「フェイク・ニュース」と言い放った。その後も、トランプ大統領は気に入らないメディアに対して「フェイク・ニュース」とツイートして非難し続け、この言葉は全世界の流行語になった。しかし、その約 2 年前の 15 年 1 月、ドイツでは「2014 年のイケない言葉」として「フェイク・ニュース」と類似した「うそつきプレス」という言葉が選ばれ、話題となっていた。ちなみに、ここでの「プレス」という言葉は、新聞や雑誌といった印刷物だけでなく、メディア全体を指している。

では、先に見たように、伝統的メディアが優勢で信頼が寄せられているドイツで、いったい何が起こったのか。

実は、この「うそつきプレス」という言葉は、近年台頭しているドイツの排外主義の右翼市民運動「西洋のイスラム化に反対する愛国的欧州人たち、通称ペギーダ（PEGIDA）」が、デモ行進の際のシュプレヒコールに使ったものだった。

「うそつきプレス！ 黙れ！」

PEGIDA のデモは、2014 年末から、旧東ドイツ側の古都、ドレスデンを中心に盛り上がった。とくに同年 12 月 15 日には、「急進的イスラム教反対」「犯罪者の難民たちを追い返せ」、あるいは「偏狭的フェミニズムとの戦い」など、それぞれ思い思いに「リベラルな思想」に異議を唱えたプラカードを掲げ、約 1 万 5000 人がデモ行進に集ったとされる。デモの参加者たちは、メディアは自分たちを極右と決めつける、自分たちの主張を不正確に扱う、偏向報道だ、私たちのことを真面目に取り合ってくれない、不公平だ、意見操作をしていると苛立ち、「うそつき」だと気勢を上げたのだった。こうした右翼市民運動から「うそつきプレス」という「イケない言葉」が生まれたわけだ。

では、実際、どこが「イケない」のか。

2014 年の「イケない言葉」賞に「うそつきプレス」が選ばれた際、次のような説明がなされている。

「うそつきプレス」という言葉は、すでに第一次世界大戦時の中心的闘争概念であり、独立系メディアを十把一からげに誹謗中傷し、ナチス国家社会主義のために使われました。この表現はそのような歴史を引きずっています。しかし、昨年来、「憂慮する市民たち」としてこの言葉のプラカードをもってデモ行進する人々の大部分は、その事実をあまり知らずに使っているようです。しかし、知らないことによって、この言葉を意図的に使う人々に、狡猾に利用される道具となっています。（“イケない言葉”のホームページより）

この賞は、東西ドイツ統一後の 1991 年にドイツの言語学者のグループによって言語教育的目的をもって設けられた。それは、「何気なく一般に使われている言葉に注意喚起を促し、国民の間で言葉に対する自覚やセンシティヴィティを養ってもらうためにつくられ」ており、「人権侵害にあたる言葉や言い回しに対して批判的な視線をもってもらうことを目的としている」という。毎年、一般公募をして集まった言葉の中から選ばれており、2014 年は、1250 通の応募があった。しかし、その中で、この「うそつきプレス」を候補にしたのは、わずか 7 通だったという。それにもかかわらず、審査員たちはこの言葉を選んだ。

(A) それは、この言葉が民主主義への脅威になりうる深刻な意味を含んでおり、そのことをあえて社会に警告するためだった。というのも、PEGIDA の運動に参加した人々の多くは、極右の政治運動家というより、一般市民だった。他方で、PEGIDA を主宰するルツィ・バッハマンは、フェイスブックやツイッター上で難民たちを「虫けら」と呼んだり、ヒトラーを連想させる自身の口ひげの写真を掲載したりと挑発的な行動を繰り返していた。

こうした状況が言語学者たちにとって、いっそう危機感を募らせた。つまり一般の人々が、語源を知らずに「うそつきプレス」と呼びながら、極右の政治運動と合流してデモ行進をする—これは、現代ドイツ社会の一つの側面を語っている。

そこで、まずはこの「うそつきプレス」という言葉の由来を見てみたい。

ドイツの「うそつきプレス」という言葉は、19 世紀に流行したユダヤ人陰謀説と密接な関係にある。陰謀説にはさまざまなものがあるが、あえて定義をするならば、表向きのテキストの裏側に、秘密かつ悪意の「策略」が潜んでいるとし、大概は背後に「影で糸を引く」何者かが自らの利害のために暗躍するというストーリーになっている。日本でもよく知られている陰謀説は、英國ダイアナ妃暗殺説、9・11 米国同時多発テロ事件の合衆国政府関与説などである。そして、陰謀説は、いずれも近代商業メディアと表裏一体となって生きながらえてきたというのが、近年の学界の定説でもある。それはまた、一過性の噂やデマ、個別の利害をめぐる意見操作などとは異なり、近代社会の地下水脈として流れ、社会のありようを決定するような深大なストーリーにつなげて展開される。したがって、陰謀説は、話のスケールが大きい。背後には、国家や大規模資本などの権力が存在し、それが組織的に関与し、世界の方向性を決定するといった壮大な語りが展開する。「世界中の資本家がメディアを牛耳って、労働者を洗脳している」「英國王室がダイアナ妃の暗殺を企てた」「合衆国政府がテロリズムを自作自演している」などがそれに当たる。

陰謀説は、どこかで歐州中世の悪魔、魔女裁判などとも共通性がある。それらは、人間に備わった未知のものへの恐怖や不安、そしてその克服欲求が拡散の原因になっている。こうして、陰謀説は、非科学的な語りの代表としても扱われてきた。人間の感情、つまり割り切れなさ、やるせなさ、あるいは悔しさを、なんらかのステレオタイプ的な型によって因果関係と結び付けて理解しようとする。それが「陰謀説」のはじまりとされる。とりわけ、社会が分業化、複雑化して見通しがきかなくなった現代、「陰謀説」の説明力は魅力的だ。



話をドイツに戻すと、ドイツでは 1848 年の三月革命以降、次々と新しい新聞が創刊されたが、当初は政党意見紙の色合いが強かった。しかし、そこに変化が起こるのは 71 年以降、ドイツ帝国が成立して帝国経済が発展した時期である。帝政ドイツでは信仰の自由が認められ、ユダヤ人にも市民権が与えられた。と同時に、法的平等が実現し、新聞業にも、ユダヤ人が進出し、産業が一段と発展していった。

陰謀説はまったく根も葉もない、うそのストーリーだが、何らかの事実が含まれているのが特徴である。ユダヤ人陰謀説でも、当時のドイツ帝国で多くのユダヤ人が新聞業に進出したことは事実であった。そして、そのことをよく思わない同業者も多くいただろう。そんな状況の中、19 世紀末から 20 世紀に流行った「ユダヤ人世界征服陰謀説」が新聞業とつながり、「ユダヤ人新聞」が西欧社会を洗脳しているというストーリーがもっともらしいものに仕立て上げられていった。以降、ユダヤ人陰謀説には、新聞業の重要ポストに就いていたユダヤ人リストが添えられるようになり、ユダヤ人が経営する新聞は「ユダヤ人新聞」と呼ばれ、非難された。この動きに目をつけたナチスは、目障りな新聞（ユダヤ人支配の新聞、共産主義の新聞など）をまとめて「うそつきプレス」と非難し、これらの新聞の名声を貶めようとした。

2014 年に「イケない言葉」として選ばれた「うそつきプレス」という言葉は、こうしたユダヤ人差別、そして何よりナチスの残像を引きずる言葉だったわけである。この言葉の歴史的誕生経緯について、賞は注意喚起を促し、現代ドイツ社会の右傾化を警告したのであった。

（出典 林香里『メディア不信—何が問われているのか』岩波新書、2017 年。問題作成にあたり、一部を改変）

- （1） 下線部（A）について、審査員たちがこの言葉を選んだ背景と、賞を与えることで期待した効果を、書き始めを「一般市民」として、75 字以内で説明しなさい。（「一般市民」の 4 文字は解答用紙にすでに印刷しています。）
- （2） 下線部（B）の「この言葉の歴史的誕生経緯」について、著者が本文で述べていることを簡潔に要約し、この言葉に関してあなたが考えることを、300 字～350 字で述べなさい。